

中政都市漫歩①

## クラクフ——月の都あるいはネクロポリス

関口時正

一〇三九年、王がここに居を定めて以来、クラクフは、六〇〇年間ほぼ継続してポーランドの首都だった。

一三二〇年には、ヴァウエル城の大聖堂で初めて王の戴冠式が行われ、以後一七三四年まで一つまり一七世紀初頭に王がワルシャワに移り住んだ後もなお一戴冠式そして王の葬儀はクラクフで挙行され続ける。これは、後のクラクフの町の性格を決定してゆく、一つの重要な事実である。

現在でもこの町の一つの枢軸であるヤギェウォ大学

隠修士会などが加わり、クラクフの文化における決定的な役割を演じはじめる。

今日でも、クラクフの町を歩く者の目をひきつけるのは、おびただしい教会である。そうした教会や修道院の間を縫うように歩き、自分でも覗き込み、お坊さんや尼さんと袖すりあつて行けば、社会主義ポーランドはどこにあるのかという気もしてくるはずである。筆者は中でもカシミエシユ地区の聖カタジーナ(カテリーナ)教会や聖体教会、あるいは中心部のドミニコ会教会などが好きで、よく人を案内したりもするが、考えてみればこれらはみな一四世紀ゴシックを基本とした煉瓦の建物である。大広場のマリア教会は、この町の顔としてきわめて有名なが、これがその、やや人懐かしい肌合いを持つクラクフ・ゴシックの典型である。

かといって、一つの時代様式で固められた建物もほとんどなく、つぎはぎだらけであると同時に、町全体もモザイクである。ただ重心が中世にあることは疑えない。

平時もあれば横断できる、小さく、閉じられた市街の構造が完全に中世のものであると同時に、制度の上でもここには近代がなかった。その意味では、絶対王政も産

は、ウィーン大学に先立つこと二年、一三六四年に創設された。中部ヨーロッパではアラハの大学に次いで古く、コペルニクスも学んだとして知られるアカデミーである。おおよそのところ、この一四世紀から一六世紀までが、クラクフの文化の最盛期だったと考えていい。

一方、キリスト教徒の活動も早くからめざましかった。一二世紀末、二千にも満たない住民人口に対して、すでに数十の教会が存在しているのは驚くべきである(この頃のロマネスク建築として、唯一全体の結構を今日に残しているのが、グロツカ通りの聖アンジェイ教会である)。修道会も、ベネディクト会が早く一二世紀に到来し、一二二〇、三〇年代にはドミニコ会、フランシスコ会、シト一会などが、一四世紀にカルメル会、アウグステイヌス

業革命も経験しなかつたポーランドを、クラクフは、そのまま体现しているようなものである。

筆者は、一六年前ヤギェウォ大に留学して以来、この町とも人々ともすつかり深いつき合いになつてしまった。日本で京都人がとやかく言われるように、クラクフの人間も、好悪ふくめて色々評されるが、大体のところ私はクラクフの味方である。

実際に訪れなくとも、ある場所に興味が持てるのであれば、それは自分の親しんでいる事物がその場所に関わりのあることを知つたときであるが、ポーランドと縁が薄かつた日本には、クラクフという町の存在を教えるような(物)は何もない。しかし、人物はどうだろうか。

クラクフに生まれ、あるいは住み、格別の思いをこの町に寄せる人物は多い。現在では例えば劇団『グリコ2』を主宰し、米日公演も一度したタデウシユ・カントルがいる。仕事場は、一四、五世紀の横丁の景観を最もよく残すといわれる、湾曲した、古臭い、カノーニチヤ通りにあるが、その仕事自体がクラクフから切り離して考えることのできない中身であるということについては、こ

ここでは説明しきれない。

SF小説でよく知られたスタニスワフ・レム、作曲家クシシュトフ・ペンデレツキも長年クラクフに住んでいる。ペンデレツキは、一九八〇年頃のインタヴューにこう答えている。

私と同じようにクラクフに魅了された人たちが、これまでも色々と言ってきたわけですが、それに私が何か付け加えることなどできますか？ 独特の雰囲気——それは、ここにいと驚くほど身近に感じられる、歴史かも知れないし、フ라우スト博士がここで学んだという事実かも知れないし……いや、勿論冗談です。しかし、このクラクフの霧には、何か魅惑的なものがある。この霧がどんなふうに人間に作用するのかはわからないし、土台無駄なことだから、分析しようとも思わない。(…)要するに、他の町に住むなどということとは、想像もできないのです。

当代のローマ教皇ヨハネ・パウロ二世、すなわちカール・ヴオイテイワも、一九七八年一月、コンクラーク

エで教皇に選ばれるまでの四〇年間をクラクフで暮らした人物である。ヴオイテイワは、この町で文学を学び、舞台上立ち、聖職に志し、詩を書き、司教になった。ヴオイテイワもまた、クラクフでなければならない、少なくともワルシャワには生みえない型の人間である。

右の四人がクラクフに愛着をもって住み続けたとすれば、文化人類学者ブロンスラフ・マリノフスキ、小説家ジヨウゼフ・コンラッド——この二人は、むしろクラクフの磁場に抵抗して遁走、新天地を求めていった。

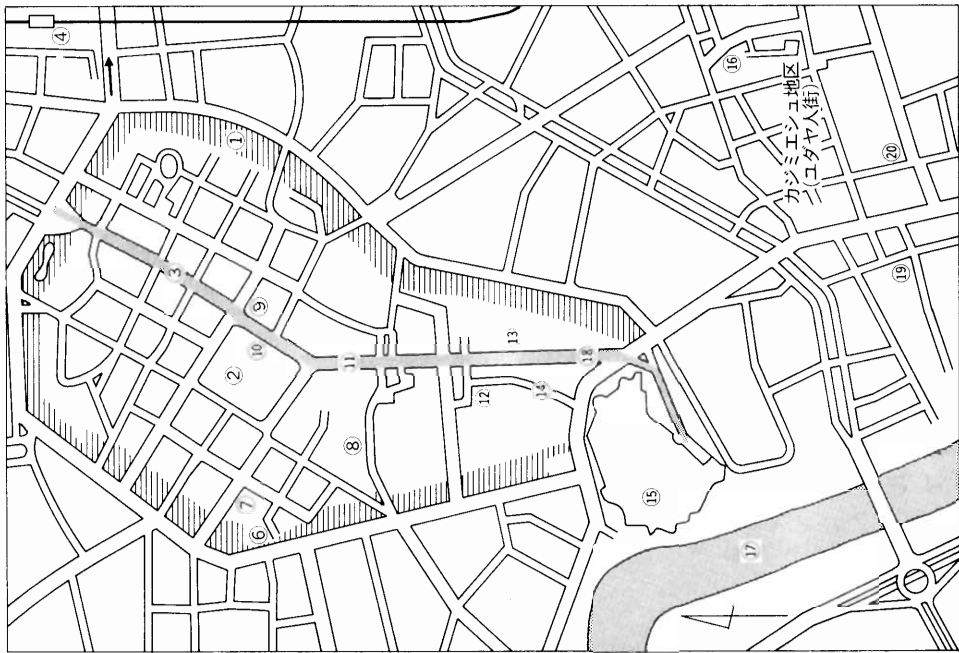
個性だけではなく、四人と二人の生きた時代が違い、クラクフもまた違ったのである。

ジヨウゼフ・コンラッド、すなわちユゼフ・コジエニョフスキが出国したのは二六歳、一八七四年のことである。フランスで遠洋航路の船員になり、やがて英語で小説を書き、今世紀の初めには世界的な名声を博すにいたっていた。

一九一四年、実はコンラッドはポーランドからもう一度逃げ出す。

コンラッドはこの年家族とともにポーランドに招待され、七月二九日の夜おそくクラクフに着いた。四〇年ぶ

クラクフの旧市街



- ① 緑地帯「ブランティ」(かつての城壁)
- ② 大広場
- ③ フロリアンスカ
- ④ クラクフ中央駅
- ⑤ ラコウヴィツキ墓地
- ⑥ コペルニクス像
- ⑦ ヤキエウオオ大学(文学部など)
- ⑧ ヨハネ・パウロ二世像
- ⑨ マリア教会
- ⑩ ミツキエーヴィッチ銅像
- ⑪ グロツカ通り
- ⑫ 「クリコ2」
- ⑬ 聖アンジエイ教会
- ⑭ カノニーヤ通り
- ⑮ ヴェヴェル城
- ⑯ レムーのシナゴグと墓地
- ⑰ ヴイスワ河
- ⑱ 「王の道」
- ⑲ 聖カタジーナ教会
- ⑳ 聖体教会

りのクラクフである。コンラッドは寝つかれず、息子を連れて散歩に出た。

宿はスワフコフスカ通り五番地のグラントホテルで、まったくの町中であり、中心の大広場まで歩いて「ブロック、一分とかからない。

大広場は、彼の表現によれば「緑いつばいまで月光に覆われていた」。白い手袋をした警官が角に立っているほかは、人つ子ひとりいない、自分たちの足音のこだまさえ、どこかへ吸いこまれて聞こえない、冷たい光に照らされた街の壁の中を歩きながら、コンラッドは少年時代を思い出していた。

夜一〇時になると集合住宅の門は閉ざされ、その後は門番に二〇ペラー払わないと開けてもらえないので、一〇時以降は街が死んだようになるというのが、当時のクラクフだったというが、これは社会主義になってからそんなに変わったのだろうか。

その狭い通りにそれ以上立ち留まっていたら、私は、自分の呼び出した亡霊たち(Shadow)の餌食になりかねないという気がした。古い希望、その苦い虚業、そ

ろ、ひとりで従う二才のコンラッドに注がれる、浴槽の、無数の「じつと動かぬ、真剣な眼」の列、それら眼の堆積した壁そのもの、すなわち町のShadowが、群がり来たのである。

だがコンラッドも微妙な瞬間に故国へ帰ってきたもので、二日後オーストリア・ハンガリーは総動員令を発し、帝国の治下にあるクラクフも大戦に巻き込まれていった。コンラッド一家はザコパネの保養地へ移り、一〇月初めにはポーランド国外に逃れる——なぜ祖国を棄てるのか、という非難の聲に追われつつ。

実際クラクフは、特に一九世紀半ば以降、ひっきりなしに葬列の通過する町であった。

一八世紀末の三国分割によってクラクフはオーストリア領となったといつても、間もなくウィーン会議(一八一五)によって、小さな中立国「自由都市クラクフ」(「クラクフ共和国」)が成立した。その後一八四六年の「クラクフ革命」を契機に再びオーストリアに併合されたものの、二〇年後には、オーストリアはプロイセンとの戦争に負け、ハブスブルグ各国に自治が認められるという経過を

れに埃の味のいりまじった、まとわりつくような、墓場の空気。私めがけて群がり来る、執拗な、得体の知れない亡霊たち。

「さあ、もうホテルへ戻ろう——私は息子に言った——大分晩くなった」

### ポセルスカ

狭い通りとはワリヤスカのことである。コンラッドは、この瞬間まで自分の父の葬列を思い出していた。ポセルスカ二三番地の家から、いわゆる「王の道」(ダロツカ通り—大広場—フロリアンスカ通り—バルバカン)に従い、ルービツチュ通り、ラコウイツキ墓地とたどったはずの、一八六九年五月二四日の野辺送りのことである。

社会的正義感と愛国心を兼ね備えた作家として、つとに民衆の尊敬を集めていた父アポロの葬儀に、なんら忘まわしいものはなかった。天気も良かった。多くの参列者の集う立派な葬儀であった。

四〇年ぶりにクラクフの町を歩くコンラッドに驚いかるのは、父の亡霊やその死の記憶というよりも、町そのものであったというべきである。あるいは、棺のうし

たり、通算すれば一九世紀の三分の二近くの時間、クラクフは実質的な自由を享受していたのである。

クラクフは、オーストリア領であったのが幸いだと、ワルシヤ人がいうのも当然で、たしかにロシア領、プロイセン領のような、苛酷な植民地政策は知らなかった。マリノフスキなどは、むしろハブスブルグ連邦のあり方を積極的に評価している——

私はここで、凡そ正直で真率なポーランド人であれば、曾ての「二重君主制」について、称賛以外のいかなる態度も示し得なかった筈だと、明言しておきたいと思う。私見によれば、大戦前のオーストリアの、その連邦制度は、少数民族のあらゆる問題に対する、妥当な解決策であった。小型版、国際連盟のモデルであった。

たとえ英国籍の人類学者であったとしても、ポーランド人が人前でここまで言うのも珍しい。

ともかく、ポーランド人の愛国的な行事については、他のロシア領やプロイセン領では締め付けが厳しすぎる

ので、みな自由なクラクフに集中した。

自由都市時代の大きな行事としては、一八一七年にユゼフ・ポニャトフスキ公の、翌年にはタデウシユ・コシチュエーシユコの、王ではないが英雄の、王のためのような盛大な葬儀が、ヴァヴエルで執り行なわれた。さらにガリツィア（オーストリア＝ハンガリー帝国のポーランド内領地の通称）が自治権を獲得してからは、中世の名君カジミエシユ大王（二三一〇～一七〇）の壮大な「再葬儀」（一八六九）というような風変わりなこともあった。こういう行事を挙げることで『ポーランドは未だ死なず』『ポーランド国歌』ということを示し、桎梏に悩むロシア領、プロイセン領のポーランド人を奮い立たせようというわけであった。

一八九〇年には、クリミア戦争のさなかにイスタンブールで客死した（一八五五）詩人ミツキエーヴイツナの「追慕」が行なわれた。パリのモンモランシーから列車で運ばれた遺骸は、「王の道ではなくヴァルシヤフスカ通り、スワフコフスカ通り、大広場、グロツカ通り、ヴァヴエル大聖堂と行進している。この時の賑わいもポーランド中に大きな反響を残したものである。ユゼフ公、コ

シチュエーシユコ、大王、ミツキエーヴイツナと、一九世紀の四大葬儀などと名付けてもよいかもしれない。

葬式がヴァヴエルだけで行なわれたわけではない。一八七〇年代末には、城の南隣り「スカウカ」に功労者のための納骨堂を再建し、画家や詩人、学者などの、主に「文化功労者」の遺骸・遺骨を収めだした。これがまた毎年のようにありながらも、町をあげての大行事なのであった。

そしてもう一ヶ所、一般市民も葬られる、我々にも親しみのあるラコヴィツキ墓地というものがあって、ここへの葬送行進もまた、それが公的な意味合いを持つものであればかならず町の中心を横切つた（たとえばコンラッドの父の葬送）。大貴族から普通の町人まで、美しく彫刻された墓の並ぶ、緑濃い、この墓地は、それ自体が再三訪れるに値する立派な美術館であるといつていい。

さらにはまた、ソビエツキによるウイーン解放三百年祭（一八八三）、コシチュエーシユコ蜂起百年祭（一八九三）、ミツキエーヴイツナ生誕百年祭（一九〇九）、スウォヴァツキ生誕百年祭（一九〇九）、グルンヴァルトの勝利五百年祭（一九一〇） などなど——葬いでなく祝賀であつて

も、この町を練り歩いたほとんどすべての行進行列は、過去に顔を向けてのものだった。

ここで注意しなければならないのは、世紀末頃ワルシヤワの人口はすでに六〇万、ヴロツワフは四〇万を数えていたが、クラクフは、たかだか九万人の小都市だったということで、人口に対する葬儀の密度ははなはだ高かった。住民は、他人のといわず自分のといわず、年がら年中葬式に参列していたわけである。

ベル・エポック時代のクラクフで、昼間は医業にうちこみ、夜は文学キャバレーを興し、歌を書き、フランス文学の翻訳に傾注し、クラクフを熱愛したタデウシユ・ボーイシェレンスキは、こう書いている——

死は、生活に必須の要素になっていた。クラクフの日記に何より欠かせぬ事実は——葬式だった。ヴァヴエル、スカウカがあることによつて、クラクフは、全ポーランドのための一大霊安室という役割をはたしていたのである。

ボーイはここで、霊安室 dom przedpogrzebowy と

いう言葉を使っているが、すでに以前から、クラクフは王たちのネクロポリア nekropolia（『共同墓地』）であるという言い方があつた。文字通りに受け取れば、これは「死者の都市」の謂いである。

クラクフは、当時ヨーロッパでもっとも結核患者、結核による死亡者の多い町の一つにあげられていた。住人の二百人に一人は結核で死んだようである。肺炎も多かった。盆地内にあるこの町の空気の悪さは、昔も今も人々の嘆くところである。となれば、名実ともに死者の都といつてもよいくらいで、またそれに見合うだけ、あるいは十分過ぎるほど教会の数も多かつたのである。

クラクフはポーランドでもっとも美しい町であるといわれる。観光案内であればそれも当然の表現だが、多少まじめに考えてみると、「美しい」という言葉はどれも落ち着かない。単純に美しいというには、この町は、妙なところ、いい加減なところ、ちぐはぐなところが多すぎる。加えて現在では、共産主義政権が近くに作つたノヴァ・フータ（ポーランド最大の冶金コンビナート）やスカヴィーナ（アルミ製錬所などの）排出物公害による汚染がひどい。外気に曝された彫像などは、現に溶けつつある

のわかる。

ボーイも、実に多くの賛辞をクラクフに贈ったが、美しいとはあまり言わなかった。単刀直入なところでも、「クラクフ——それは、天下でもっとも風変わりな町、時代をこえて地球上唯一無二の代物だったことは間違いない」というような言い方である。

ボーイはまた夜のクラクフを推奨した——

自然との関係もまた変わっていた。お日様もここではどうも居心地悪いらしく、悲しみをそそるようだった。彼が遠慮なく照らし出すのは、ほかでもない、生活の貧しさであり、青白くみすぼらしい女たちの顔であり、つきあてだらけの流行らぬ装束であった。これにひきかえ、お月様はあたかも我が家にいるごとく、狭い横丁や街路の景色と見事に調和していた。お月様と住民とは親類同士でもあるかのようだった。クラクフは、月の都、夢遊病者の町である。クラクフ以外の土地にいて、月に関心をもった覚えはとんとなし。しかしクラクフで満月が上れば、私はじつとしておれずに家を飛び出した。

——実はクラクフの中にもう一つのネクロポリアがある。城の南のカジミエシュである。一五世紀頃から多くのユダヤ人が住みついていたこの町も、現在ではクラクフで最も荒れ果てた地区となった。かつて八つもあつたシナゴグもみな閉鎖される中、唯一活動を続け、アメリカや西欧からの巡礼の目的地ともなっているのが、レムーのシナゴグ、その周囲の墓地である。ここへは、筆者もクラクフへ行くたびに訪れる。破壊された墓石の断片を継ぎ合わせて作った壁が凄まじいが、たしかに無縁仏とするよりは、よい考えであつた。

死者の町そのものであるような、このカジミエシュにもホテルを建てるなどの再開発の計画が最近出てきた。もちろんニューヨークあたりのユダヤ人たちが資本を投入してということである。

(せきぐち　ときまさ・東京工業大学助教授)

